

## 論文内容の要旨

氏名：13604 山方 充

博士の専攻分野の名称：博士（芸術学）

論文の題名：『中学校教師のパフォーマンスに関する研究—教師の自己表現を中心に』

長らく“芸術”は芸術家および芸術学研究者のものであった。しかしながら“総合芸術”という概念の発生により、今日において芸術は多様化し、日常に生きる“非芸術家”である我々人間すべてに関わる分野となった。それを佐藤は「芸術が本来持つ生命力の鼓舞と社会の幸福に必ずや貢献できるに違いない社会福祉としての芸術の可能性」（日本大学芸術学部, 2012, p.64）であると指摘した。それは、芸術学研究の領域において積み上げられてきた叢智を社会に還元していくことこそが総合芸術の今日的な使命であるという指摘である。

本論文『中学校教師のパフォーマンスに関する研究—教師の自己表現を中心に』は、職業的演技の一部として捉えられる“中学校教師の自己表現”に注目し、現代の中学生の傾向も踏まえた上での“より良い自己表現のためのトレーニングカリキュラムの構築”を目指した研究である。近年中学校教育現場における教師と生徒との信頼関係不足による深刻な問題が増加している。信頼関係づくりの第一歩として生徒が教師に好感を持つことが大切な入口となる。これについては第3章第1節で詳述する。本論文において提案する“中学校教師のためのパフォーマンストレーニング”の目的は、生徒の教師への好感度を高めることにある。そのために、本論文ではアンケート調査により明らかとなった“生徒の教師への好感度と非言語的パフォーマンスとの相関関係”を主たる論拠としてトレーニングカリキュラムを構築した。

思春期は、人格形成において重要な期間である。なぜならば、それまでは両親の価値観をそのまま自身の価値観として受け入れていた子どもが、様々な価値観に触れ、ものの善悪を自身で判断するようになるからである。子どもは思春期の中で様々な情報、価値観を取捨選択し、最終的に自分だけの価値観を持つようになる。したがって、思春期の子どもと接する教師は、自身の言動が子どもに何らかの影響をあたえる可能性を常に有していることに意識的でなければならない。

思春期において不安定な心理を内面に抱えた生徒と接する中学校教師には、自身の振る舞いを意識的にコントロールする力と共に、生徒の心理状態を的確に判断する能力も求められる。生徒の心理に関しては、発達心理学や教育心理学の発展、普及により、中学校教師にとっては一般的な基礎知識となっている。しかし、生徒の心理状態を把握した上での実際の振る舞い方に関しては、実習・演習的な方法で習得する機会がほとんどないのが現状である。

現代は情報社会であるため、保護者はインターネット等を通じて専門的な知識を容易に取得することが可能である。故に、保護者が中学校に対して要求する事柄は、即時改善を前提としたものが多い。しかしながら、教師の自己表現能力、コミュニケーション能力を即時的に向上させる方法論というものは現状で確立されるに至っていない。つまり、思春期の生徒の心理が解明され、教師は生徒に合わせた自己表現を選択する必要があることは自明であるにも関わらず、自己表現能力向上のための訓練は、教師個人の“経験”に依っているのである。

そこで本論文では、生徒に好感をもたれる自己表現力を持った中学校教師の育成を目指し、パフォーマンス学の知見を活用したトレーニングカリキュラムを構築し、教師教育への導入に資することを目的とする。

### 第1章 パフォーマンス学とは何か

本論文第1章ではまず、パフォーマンス学の概要を、先行研究を基に整理した。パフォーマンス研究とは、Goffman (1959) による人間の演技性に対する指摘に端を発し、Schechner によってその体系が整備された、人間の演技性を探求する学問である。日本においては佐藤 (2003) によって研究と普及が進められており、「日常における個の提示 “presentation of self in everyday life”」（Goffman, 1959）、「日常生活における個の善性表現」（佐藤, 2003）という視座に立てば、日常生活における我々の挙動の一切は観察、分析、強化が可能なものとなる。本論文においては中学校教師の生徒に対する自己表現をパフォーマンスとして捉えることで、トレーニングによる自己表現力の強化を目指す。

## 第2章 現代の中学生の特徴

第2章では、中学校教師の理想的な自己表現を探る上で重要になる“現代の中学生像”について先行研究を基にまとめた。現代の多様化したグローバル社会においては、中学生の友人関係は多元化の様相を呈している。すでに友人関係の希薄化(西垣, 2009)や、キャラクターを軸とした自己表現(土井, 2009)などが指摘されているが、ある特定の“キャラ”を演じることによって円滑なコミュニケーションを遂行しようとする傾向は現代の中学生における最大の特徴である。現代の中学生の心理的、社会的特徴に関する内容は、中学校教師が常に自己表現と生徒観察の前提として把握しておくべきものであり、また現代における中学校教師の理想的な自己表現を探る上でも重要な材料となるであろう。

## 第3章 中学校教師の自己表現

第3章では、中学校教師の理想的な自己表現に関して2つの調査の結果を基に論ずる。

調査1においては現代の中学生における理想の教師像をアンケート調査によって明らかにした。現代においては「面白い」、「優しい」、「明るい」などのポジティブな特性を持つ教師が好まれ、教師の威厳や専門性はあまり重視されない傾向にあった。回収した言葉の結びつきについては数量化Ⅲ類による抽出結果を基に散布図を作成し、「笑顔」を中心としたグループ、「接しやすさ」に関するグループ、「外見」に関するグループの3つを確認した。

調査2においては、中学校教師の非言語的パフォーマンス能力と、生徒からの教師イメージとの間に相関関係が認められるかをアンケート調査によって明らかにした。調査の結果、中学生における教師の非言語的パフォーマンス値と生徒からの好感値の関係は大学生(佐藤, 2003)よりも強く、非言語的パフォーマンスの表出能力が高い教師ほど生徒からの好感度が高いという傾向を確認した。また、非言語的パフォーマンスの領域においては、「笑顔」、「アイコンタクト」、「相互作用」の3領域が、他の領域に比べて相関関係が強いことが数値で示されたため、この調査結果を根拠として中学校教師のためのパフォーマンストレーニングカリキュラムを作成することは妥当であろうと判断した。

## 第4章 中学校教師のためのパフォーマンストレーニングの考案

第4章では、前章までに整理したパフォーマンス学の知見、現代の中学生の特徴、理想的な中学校教師の自己表現を基に、“中学校教師のためのパフォーマンストレーニングカリキュラム”を考案した。トレーニングは1回60分の全6回と設定し、その内容は「笑顔」、「アイコンタクト」、「ヘッドムーブメント&表情」、「相互作用」に関するものとした。時間と回数については多忙を極める中学校教師を対象としたものであることを考慮して、必要最低限の分量に設定した。訓練の内容は佐藤(2003)によって既にその効果が実証されているものを参考に構築し、また訓練の対象とする非言語的パフォーマンスの領域については本論文第3章調査1及び2の結果を根拠として選定した。本トレーニングの目的は、中学校教師の非言語的パフォーマンス表出能力を向上させることによって、生徒からの好感度上昇させることである。

## 第5章 中学校教師のためのパフォーマンストレーニングの実践

第5章では、前章で考案したパフォーマンストレーニングを実践した結果を報告し、その過程とアンケート調査の結果について考察した。トレーニングの実施は、都内の公立中学校において、現役の教師2名を対象に第4章で構築したカリキュラムの内容を全て実施し、トレーニングの前後で生徒を対象に当該教師の好感度と自己表現に関するアンケート調査を実施した。その結果、1名の教師については自己評価においても生徒評価においても有意にスコアが上昇した。もう1名の教師については自己評価が大きく上昇し、また生徒からの評価においては「相互作用」に関するスコアが有意に上昇した。

我が国におけるパフォーマンス学の普及と発展は、佐藤(2003)の先行研究からも明らかであるように、社会人を主な対象として進められてきた。したがって、本トレーニングにおける訓練内容も社会人である中学校教師に対して有効であることが予想されるものである。

しかしながら、今回の実践においても如実に表れたように、生徒とのコミュニケーション力を向上させるトレーニングにおいては、多忙な教師を一度に集めることは困難である。

そこで、“時間的に余裕がある”、“トレーニングという形でコミュニケーションを学ぶことに抵抗がない”という 2 つの条件をクリアする者を考えれば、“教職課程における大学生”が本トレーニングの対象として最もふさわしいのではないかというのが筆者の結論である。

教職課程にある大学生においては将来教師として社会に出る可能性が大いにあり、大学生であるが故に時間的余裕があることは間違いなく、また授業として本トレーニングに取り組む場合においては抵抗なく訓練を受け入れることが可能であろう。

ここまでの研究で現場の中学校教師においてパフォーマンス能力が重要であり、かつそれは訓練すれば向上することも明白となったが、現実問題として被訓練者となった教師の人数の少なさで証明されたように、現場の教師は自己表現訓練の時間の不足という課題を抱えている。この課題を考えれば、将来中学校教師になる可能性が高い大学生に対して本研究の訓練プログラムを実施することで、本研究の成果は最も効果的に活かされると考えられる。したがって、本トレーニングの中学校教職課程への導入を示唆して、本研究を締めくくる。